

妻が病み粥を炊いたら溢れさせ

家事の出来ない夫を描いたよくある発想。この状況から読者が何処まで句意を広げてくれるかに掛かっている。

鯨食う食わぬでいがみ合う文化

文化の衝突、対立であるから「いがみ合う」のは当たり前。読者が、「鯨」が文化としてどの程度の位置にいると理解しているかで、印象が変わる作品。

図書館にいる顔みんな賢そう

着眼点がいい。「利口そう」ではなく「賢そう」という言葉がいい。

年金が消えると支持率も消える

年金の事故と連動する支持率、ならば、憲法改正などと支持率はどう連動するのか、というところまで読者が読めるかどうか。

曖昧に生きると人が寄って来る

「曖昧に生きる」で読者を引き付けるが、その先に「何故人が寄ってくるのか？」という疑問がすんなりとは解けない。

それよりも防犯省が要る日本

こういう言葉のパロディーは数多い。

「この上は国防省を目指したい」「美しい国なら文化省だろう」など、時事としての手法としてよく用いられる。それなりに効果はあるが、鮮度が長続きしないところが難点。

甘党とちょっと男は言い難い (にくい)

言いにくい男は作者か、だとすれば「私は辛党ですから」と自分で言うだろうか？甘党・辛党は自己評価というより他者からの評価では。

大欠伸したのか猫の目に涙

猫は本当の猫なのか、コケティッシュな女性なのか。読み手を楽しませる。

思い出を半分にする大掃除

作者・もしくは句に詠まれた人は物持ちのいい方なのだろうな、と読者に入ってから広がる、いい作品。

古疵がほのかに疼くクラス会

読み手によって「古傷」から想像される事柄に違いが出る。そこがまた面白いのではないか。

ライオンに習うヒト科の子育て記

獅子は千尋の谷に子を落とすというが、そこからの着想か。読み手の感じ方で広がるか。

美しい国を見てから逝くつもり

時事として優れている。「逝く」という言葉がいい。「死」という単語を嫌う人もあるが、必ずやって来る「死」と「逝く」という動詞に作者の意思を感じる。

麻疹です孫ではなくてうちの婿

麻疹の免疫に対する報道を上手くこなしている。ここで使われている「孫」は主語ではないため、ありふれた「孫」の句とも一線が引かれている。

遺言書「まだ」と「もう」とがせめぎ合い

この「まだ」と「もう」は「遺言書を書く行為」なのかが見えにくい。

「7号」の体型今や「15号」

号数がどう感じ取られるか。号数から体型が具体的に想起されるのかどうかが気になる。拙句「裸より服のサイズが恥ずかしい」

合言葉嗅ぎつけ事件記者走る

「合言葉」が難しい。記者の間でのものなのか、警察の隠語の事なのか。

一病を持ち寄る老いがまだ元気

病院の待合室という読みは浅いのかもしれない。趣味の会でも、何でもいいのだろう。頭と後ろの言葉の差が面白い。